

本一冊を丸ごと授業で扱う（一年）

新しい指導を考える会

本校の「読書」に関する取り組み

本校では夏期と冬期の長期休業中に、学年全員が一冊の同じ本を読み、長期休業後にその本を使った授業を展開している。宿題として課すだけであると生徒たちの負担も大きいと考えられることから、長期休業前二週間を「朝読書」の時間としてまとめ取りしている。

これまで星新一訳の『竹取物語』（角川書店）、辻仁成の『そこに僕はいた』（新潮社）、池澤夏樹の『南の島のティオ』（文藝春秋）を扱った。

本稿では、教科書教材にある『竹取物語』と関連させて取り組んだ二つの実践を紹介したい。

星新一訳『竹取物語』の魅力

『竹取物語』は古典の入門単元としての教科書にも掲載されている。音読・暗唱・歴史的仮名遣いの学習は、単元として継続的に取り組んでいる「古典暗唱」の時間に回し、本単元では、日本最古の物語であり、だれもが読んだことのある「かぐや姫」の話や、現代語訳で全編通して読むという学習を行った。テキストには、星新一訳『竹取物語』（角川書店）を使用した。

この本を学習材としたのは、原文に忠実で文章が平易であるのももちろん、SF作家としての訳者自身の解釈や解説、補足

「表の作成例」としては、五人の貴公子たちの話を整理するというものを用意した。「貴公子名・宝物・入手方法・結果・生まれた言葉・詠まれた和歌」といった項目を立てて、それに関する必要な情報を素早く読み取って整理したのである。学習者には、自分の関心に応じて読み取る情報の項目を変えたり、考えたりしてよいと伝えた。

一	童登場人物 かぐや姫 石玉の皇子・鹿持の皇子 大納言の六体の御行 中納言の上の御足反	生まれた言葉 「はは、呼ぶの变化」	短歌	場所 家 竹林 場所
二	古座の皇子	「鐘を待つ」石の鐘た 持てれば、割れてなす るなら、取さなくとも 大意味、取さなくとも 「生まなみ」不思議な かた目にあつたの海味	海山の道にをづくはて おく雲の光をにそやせまし 小倉山にやにもあけ入 白山にあへは光の末すま 鐘を待つてせむらひの性 手折のたけにたけし	山寺
三	鹿持の皇子	「生まなみ」不思議な かた目にあつたの海味	手折のたけにたけし	家
四	五			

▲表の作成例

▼プレゼンテーションの様子



○時間に対する意識が現代とは違うと思う。『竹取物語』の人々は恋でも何でもゆったりとかまえていた。

○子どもを大切に育てる心や、その子どもと別れるときの悲しさなどは現代と共通している。

○これは平安時代のSF！昔の人もでっかい夢をもっていた。

○昔の人も「ダジャレ」が好きだった。

おわりに

活字離れが進んでいる今、中学生に一冊の本を読み通した充足感を味わわせたいと考え、本一冊を丸ごと授業で扱う実践を重ねている。今回の実践では、古典を楽しむことを最終の目的としつつ、情報の活用能力を身につけることも意識して授業を展開していった。

教科書教材から読書に発展させる試みはこれまでも実践してきたが、これと並行して、本一冊を丸ごと使った実践を重ねていきたいと考えている。

実践2 交流を通して古典に親しむ（四時間扱い）

本単元では、『竹取物語』が読み継がれてきた理由を読み解き、それを交流することを通じて古典に親しむ態度を育成することに主眼をおいた。

実践1で整理しながら考えたことについて、要点を示しながら

が随所にちりばめられていてわかりやすいからである。その中でも各章末にある訳者の「一息」のコーナーは、さまざまな課題を学習者に投げかけてくれる。さらに挿絵が多く、しかもページ大であるので、当時の生活様式を知ろうえでの手がかりを与えてくれるということも、この学習教材の大きな特徴である。

実践1 情報を整理して『竹取物語』を読む（三時間扱い）

本単元では、『竹取物語』を古典の学習材として捉えるのではなく、情報の活用能力の育成を主眼とした。あとに計画していた「交流を通して古典に親しむ」（実践2）との流れを意識し、『竹取物語』に書かれている内容を、一覧できるように表に整理したのである。授業に際して、指導者が用意した「学習の手びき」は、以下の通りである。

- 最終的には、『竹取物語』という古典が、千年以上も日本人に読み継がれてきた理由（＝魅力・現代との共通点）について、考えることを目指す。
- 「自分の読み」をもつために、『竹取物語』の本に描かれていた内容を整理する。
- B4用紙一枚に、整理した内容が「一覧できるように」まとめる。

らプレゼンテーションを行った。以下は、意見の交換を通じて学習者たちが獲得した気づきである。